

組踊伝承の変遷

著者	立石 鮎香
内容記述	優秀論文（博士前期課程）梗概
雑誌名	世界遺産学研究
巻	3
ページ	61-66
発行年	2017-03
URL	http://doi.org/10.15068/00145872

組踊伝承の変遷

A Transition in the Tradition of Kumiodori

立石 鮎香
TATEISHI Ayuka

1. 序論

(1) 研究背景

近年、後継者不足により消滅の危機に瀕している伝統芸能が少なくなく、その保存と振興の緊急性は極めて高いものとなっている。伝統芸能を含む無形文化を保護する仕組みとして、国内には文化財保護法、国際的にはユネスコの無形文化遺産の保護に関する条約がある。文化財保護法における重要無形文化財で重要なのは古典文化財としての芸術的価値であり保存に重きが置かれるが、ユネスコ無形文化遺産の本質はコミュニティであり変化も文化の本質の一部に置かれている。以上から、同じ無形文化を保護する枠組みであってもその立場は様々であると言える。

本研究の研究対象である組踊は 1719 年に琉球王国の宮廷芸能として創始され、今日まで伝承されてきた沖縄県の伝統芸能であり、本土復帰の年である 1972 年に国の重要無形文化財に指定され、2010 年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表リスト」に記載されている。2004 年の国立劇場おきなわ(図 1)開場に伴い組踊の定期的な公演が可能となり、組踊史上初めての「舞台芸術」としての組踊伝承が始まる他、文化資源活用の模索が開始されるなど、近年新しい動向の見られる伝統芸能であり、今後の伝承のあり方について検討する必要がある。



図 1 国立劇場おきなわ

(2) 研究の目的

本研究は、近年の組踊に関する動向と近年の組踊

上演作品の変遷を把握し、組踊伝承の変遷の明らかにすることで、組踊及び古典芸能の伝承の展望を検討することを目的とする。

(3) 本研究の位置付け

無形文化に関する研究で伝統芸能の伝承に焦点を当てた研究は蓄積が少ない。一方、組踊に関する研究は、写本、歴史に関する研究が中心であり近年の組踊伝承について研究の蓄積がない。以上から本研究は組踊伝承の変遷について明らかにし、伝統芸能の継承について検討するという点で新規性があると言える。

(4) 論文の構成と研究の方法

序論では研究の概要を述べた。第 2 章では、資料調査およびヒアリング調査(表 1)により組踊の概要と組踊伝承の歴史について述べ、組踊伝承の全体像を把握した。第 3 章では、地元紙(沖縄タイムス、琉球新報)に掲載された組踊に関する記事 3300 件の分析から、国立劇場おきなわ開場前後の近年の組踊伝承の動向について把握した。第 4 章では、1998 年度～2015 年度の過去 18 年間の組踊上演作品の変遷について、組踊種別ごとの上演回数の変遷から分析を行った。第 5 章では、近年の組踊伝承の特徴とも言える新作組踊の創作と上演の傾向を組踊の内容と演出から明らかにした。第 6 章では第 2 章から第 5 章を踏まえ、近年の組踊伝承の変遷を明らかにし、組踊伝承及び伝統芸能の伝承の展望を検討した。

表 1 ヒアリング対象一覧

ヒアリング対象	実施日	場所
沖縄県教育庁文化財課	2016.08.23	沖縄県庁
伝統組踊保存会	2016.08.24	伝統組踊保存会事務局
国立劇場おきなわ企画制作課	2016.11.03	国立劇場おきなわ
沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課	2016.11.04	沖縄県庁

2. 組踊の概要と組踊伝承の歴史

(1) 組踊の概要

組踊は 1719 年に踊奉行^{注 1)}・玉城朝薫により創始された舞踊、音楽、せりふで構成される沖縄の伝統楽劇であり、中国からの冊封使を歓迎する御冠船芸能として琉球王国の役人により演じられていた宮廷

芸能である¹⁾。せりふは「八八八六」の琉歌の形式で唱えられ、音楽には琉球古典楽器が用いられる。「組踊を聴く」という言葉があるが²⁾、総合舞台芸術でありながら組踊を「観る」のではなく「聴く」と称している点に、組踊の聴覚的要素が沖縄の人々にとって重要であったとことが推測される。現在に伝わる組踊は約七十番とされており³⁾、物語の内容から「敵討物」と「世話物」の2つに分類できるが^{注2)}、親に孝、夫に節操、人間関係の義理を重んずるという儒教思想が描かれている点は両者の共通点であり、これには中国に対し琉球王国が儒教思想に優れた国であることを印象付けるといった目的があった。組踊は1719年の初演より1866年まで首里城で上演された(図2)。

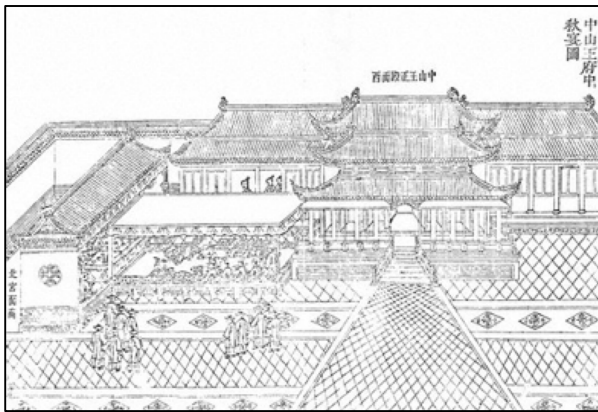


図2 首里城で行われた御冠船踊の様子

(2) 組踊伝承の歴史

(i) 琉球処分～重要無形文化財指定(1979～1972年)

琉球処分に伴う廃藩置県は、宮廷芸能であった組踊の上演機会の喪失を意味する。上演の場を失った組踊は市井の芝居小屋で伝承されていくことになり、明治以後の組踊は没落武士が生活の糧を得るための商業演劇へと変化した。その後1945年の沖縄戦で台本が焼失し上演が途絶えてしまうなど、政治的・社会的要因を背景に伝承の危機に見舞われながら組踊は細々と伝承されていた。伝承の転機となったのは1972年の本土復帰に伴う国の重要無形文化財指定である。指定以降は国庫補助金による伝承者養成が開始されるなど⁴⁾、文化財としての組踊伝承が開始される。

(ii) 国立組踊劇場誘致活動時代(1974年～2003年)

表2は文化財指定以降の組踊伝承に関する課題をまとめたものである。課題の中でも専用の劇場がないことによる組踊公演の質の低下と、戦後の組踊伝承を支えてきた保持者の高齢化に伴う後継者養成が

急務であった。このような背景が国立組踊劇場誘致活動へと繋がっていく。

表2 組踊等沖縄伝統芸能の課題の分類
(三和総合研究所(1998)より作表)

	伝承及び創造	発表及び鑑賞	研究及び交流
ソフトウェア	技芸の伝承について 表演家について 研究所について スタッフについて	公演全般について 作品について 演出について 観客について	調査研究について 海外交流について
ハードウェア	稽古場について 教育施設について	劇場について 芸能用具について	展示施設について

(iii) 国立劇場おきなわ開場(2004年以降)

2004年組踊関係者の悲願であった国立劇場おきなわが沖縄県浦添市に開場した。組踊伝承に関わる変化として、①国立劇場おきなわ自主公演開始に伴う組踊の定期公演の開始、②国立劇場おきなわ組踊研修生(後継者養成事業)の開始が挙げられる。また、劇場の開場は、宮廷芸能として創始され商業演劇、文化財という変遷を辿ってきた組踊の、舞台芸術としての伝承の開始を意味する。

3. 地元紙にみる組踊に関する報道の変化

(1) 調査対象・記事数の変遷と記事内容

(i) 調査対象

調査対象は、「沖縄タイムス記事データベース」「琉球データベース」を用い1997年以降の見出しに組踊を含む記事を抽出し、1996年度1月～2016年度12月に掲載された、沖縄タイムス1873件、琉球新報1427件、合計3300件を調査対象とした^{注3)}。記事の分析に当たり、組踊に関連する出来事を踏まえ、対象期間20年間を3つの時期区分に分類した(表3)。

表3 年代の分類(時期区分)

時期区分	対象期間	組踊伝承に関連する出来事
第I期	1997年1月～2004年3月	国立組踊劇場誘致活動期間
第II期	2004年4月～2010年3月	国立劇場おきなわ開場以降
第III期	2010年4月～2016年12月15日	ユネスコ無形文化遺産記載以降

(ii) 記事数の変遷と記事内容

沖縄タイムスと琉球新報の記事数を比較すると、特集記事の掲載などにより差が見られた年度があったが^{注4)}、第III期以降はほぼ同様の曲線を描いている(図3)。2010年度に組踊がユネスコ無形文化遺産代表リストに記載された際、記事数が増加しているがその後再び減少傾向にあることから、組踊が地元民の関心を集めたのは一時的な動向であったと言える^{注5)}。

対象記事3300件の記事内容は、6グループ14カテゴリー(表4)に分類することができた。古典組踊は琉球王朝時代に創作され今日まで伝承されてきた作品群、復活組踊は琉球王朝時代に創作されたが長

年廃絶しており近年になり復曲された作品群^{注6)}、新作組踊は昭和時代以降に創作された作品群を指す。

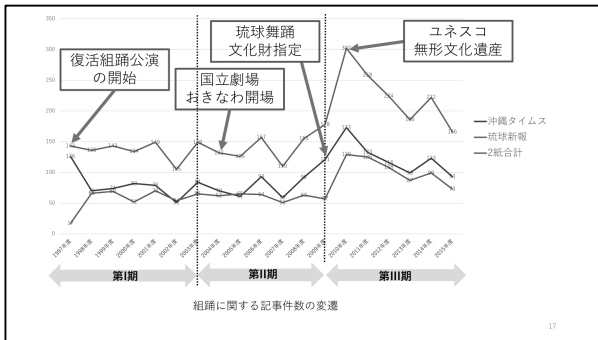


図3 組踊に関する記事件数の変遷

表4 記事内容の分類一覧

グループ	No.	カテゴリー	件数
組踊演目/公演に関連する記事	1	古典組踊	996
	2	新作組踊	322
	3	復活組踊	222
	4	その他の組踊	522
	5	現代版組踊	185
国立劇場おきなわと後継者育成に関する記事	6	国立劇場おきなわ	785
	7	伝承者養成事業	283
保持者認定に関する記事	8	保持者認定/各個認定	105
沖縄県外公演/普及公演/海外公演に関する記事	9	県外公演	127
	10	海外公演	39
	11	県内普及公演	77
ユネスコ無形文化遺産記載以降の記事	12	ユネスコ無形文化遺産	87
	13	文化資源活用	48
その他	14	その他	558

※記事により重複あり

(2) 組踊の演目・公演に関する記事(古典・復活・新作)

(i) 第I期(1997年1月～2004年3月)

古典組踊と復活組踊公演の質に関する批判的な記事が見られた⁵⁾。新作組踊に関する記事は295件中15件のみであり、その内容は大城立裕氏による新作組踊の発表と2003年の沖縄県立芸術大学学生・OBによる新作組踊公演に関する記事であった。

(ii) 第II期(2004年4月～2010年3月)

第II期においては組踊公演を評価する記事が増加する⁶⁾。復活組踊は第I期より継続して復活組踊公演に関する記事が掲載されていた他、復曲された演目を含む29題が台本として刊行された⁷⁾。新作組踊の記事は110件掲載されており増加した。

(iii) 第III期(2010年4月～2016年12月)

古典組踊の県外・海外公演に関する記事は第I期では41件、第II期では25件であったのに対し第III期は80件であり多く見られた^{注6)}。女性立方による組踊公演に関する記事が22件見られた。復活組踊は2014年度で復曲を一旦終了し、2015年度より既に復曲した演目の再演に力を入れていることがわか

った。新作組踊に関する記事は181件であり第II期に引き続き増加傾向にある一方で、新しい演出に関して「新作組踊は組踊と言えるのか」といった論争が見られることがわかった⁸⁾。

(3) 後継者養成と国立劇場おきなわに関する記事

(i) 第I期(1997年1月～2004年3月)

第I期において最も大きな課題とされていたのが、組踊の伝承者不足であり、その他に組踊だけで生計を立てることが出来ず芸に集中出来ないという実演家を取り巻く環境の改善も求められていた⁹⁾。また、国立組踊劇場誘致活動に関する記事も多く見られた。

(ii) 第II期(2004年4月～2010年3月)

第I期で課題とされていた伝承者養成に関して、第II期は国立劇場おきなわ開場に伴い組踊研修生(後継者養成事業)が開始された。一方で、国立劇場おきなわの集客率が低いという課題がみられた¹⁰⁾。

(iii) 第III期(2010年4月～2016年12月)

第III期になると、国立劇場おきなわ組踊研修生の活躍が記事から確認できることから、劇場開場以降、伝承者養成が促進していると言える。また、国立劇場おきなわの集客率は2014年には入場率7割を達成した他、2015年には過去最高の入場者数を記録するなど、開場から10年が経過し劇場運営が軌道に乗りつつあることが伺える。

(4) 小括

組踊の演目に関しては従来の古典に加え復活組踊、新作組踊の上演が見られ演目の多様化が見られた。組踊の演者は、従来の伝承者と保持者に加え国立劇場おきなわ組踊研修生や女性立方の活躍が見られたことから劇場開場以降、実演家が多層化したと言える。

4. 近年の組踊上演作品の変遷

(1) 調査対象

調査対象は国立劇場おきなわ事業報告書、伝統組踊保存会記念誌、沖縄タイムス・琉球新報より抽出した①伝統組踊保存会、②国立劇場おきなわ、③県内芸能団体により上演された1998年度～2015年度の組踊901公演とした。表5は各主催団体の組踊公演の中に公演区分を示したものである。公演区分により上演される組踊が異なることが分かる。

表5 公演区分と上演組踊一覧

主催団体	公演区分	古典	復活	新作
伝統組踊保存会	定期公演	○	○	—
	伝承者発表会	○	○	—
	復活公演	—	○	—
	県外公演	○	○	—
	県内普及公演	○	○	—
国立劇場おきなわ	定期公演	○	○	○
	企画公演	○	—	○
	研究公演	○	○	○
	普及公演	○	○	○
	各団体の組踊公演	○	○	○
県内芸能団体	国立劇場おきなわ 組踊研修生	○	—	—
	子の会	○	—	○
	女性立方のみの公演	○	—	○
	沖縄県立芸術大学 学生/OB	○	○	○

(2) 組踊 901 公演の概要

図4は調査対象 901 公演を時期区分ごとに示したものである。古典組踊の上演が他2種の組踊と比較し多く、新作組踊は第II期以降上演回数が増加していることがわかる。

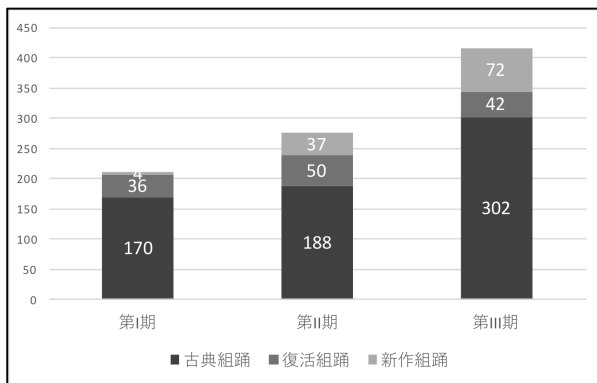


図4 対象公演 901 公演(時期区分別)

(3) 各主催団体の公演の傾向

(i) 伝統組踊保存会

図5は伝統組踊保存会による組踊公演の上演回数を示したものである。

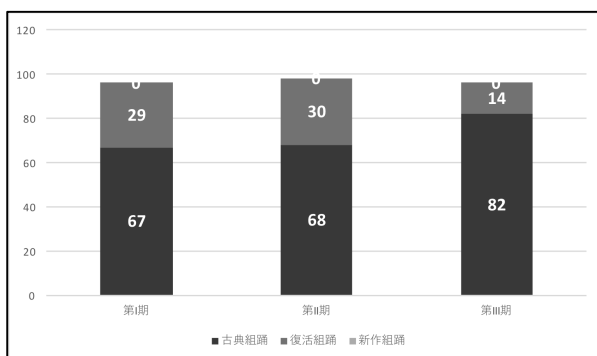


図5 伝統組踊保存会の組踊公演

公演の特徴として、古典組踊の割合が近年になるほど増加している点が挙げられる。中でも古典組踊213公演中146回が「執心鐘入」「二童敵討」「万歳敵討」

であり定番の演目であることがわかった。復活組踊は復活組踊公演における復曲の取り組みや、復曲した演目の再演が見られた。新作組踊の上演は保存会としては見られなかった。

(ii) 国立劇場おきなわ

図6は国立劇場おきなわ自主公演における組踊公演の上演回数を示したものである。

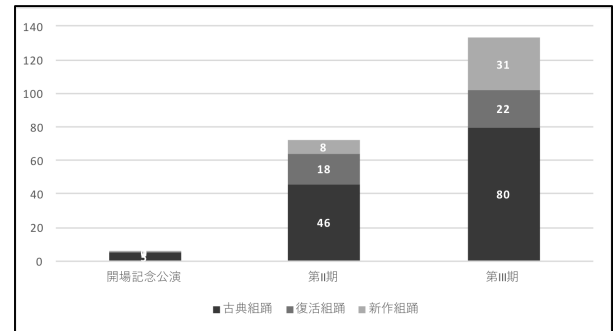


図6 国立劇場おきなわ自主公演の組踊公演

公演の傾向として、各組踊がバランス良く上演されていることが挙げられる。古典組踊は定番曲の上演に加え^{注7)}、劇場開場以前は上演頻度が低かった演目の積極的な上演を行なっている他、伝統組踊保存会により復曲された復活組踊の積極的な再演を行っている。一方で新作組踊の上演は企画公演と研究公演において行われることが多く、調査対象期間には12演目が上演された。

(iii) 県内芸能団体

図7は県内芸能団体により上演された組踊の上演回数を示したものである。

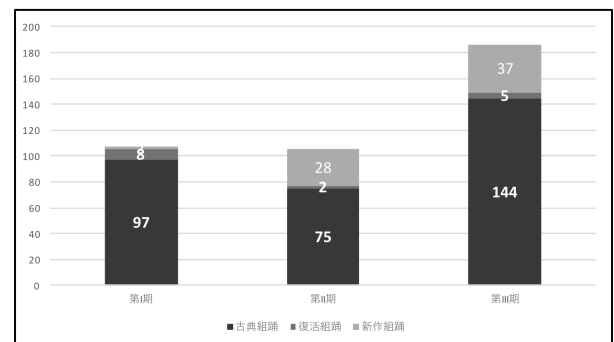


図7 県内芸能団体の組踊公演

県内芸能団体の特徴として、古典組踊の上演頻度が高く第II期以降新作組踊の上演が増加していることが挙げられる。古典組踊は308公演中174公演が「執心鐘入」「二童敵討」「手水の縁」の上演だった。一方で復活組踊の上演は殆ど見られなかった。新作組踊の上演は第II期以降急増しており、これまでに36演目が上演されている。

(4) 小括

古典組踊は、全ての主催団体で「執心鐘入」「二童敵討」の2演目の上演頻度が高いことから、定番演目であることがわかった。国立劇場おきなわでは定番演目に加え上演頻度が低い演目の積極的上演が見られた。復活組踊は主に伝統組踊保存会による復曲の取り組みと、国立劇場おきなわでの再演が見られ、県内芸能団体による上演は少ない。新作組踊は伝統組踊保存会としての上演実績はなく、国立劇場おきなわにより12演目、県内芸能団体により36演目が上演されていた。

以上より、伝統組踊保存会は伝統的な組踊の上演、国立劇場おきなわは上演頻度の低い演目の上演・再演を通じた組踊レポートリー拡大への取り組み、県内芸能団体は定番の古典組踊の上演と多様な新作組踊の上演が見られ、各主催団体により上演傾向が異なることが明らかになった。

5. 新作組踊の分析

(1) 調査対象・方法

調査対象は2003年度～2015年度に上演された新作組踊38演目とし、組踊の演目内容と演出内容の比較を通して、新作組踊の創作意図と上演の実態について明らかにすることを目的とした。表6は調査対象とした新作組踊の一覧である。

表6 調査対象の新作組踊一覧

1 組踊版スイミー	14 十六夜胡蝶	27 観堂上八太郎と玉那覇クルルン
2 真珠道	15 歌合戦-吉屋チルと忠納ナベ-	28 恋恋しよんがない節-異贈-与那国島の恋物語
3 宿納森の獅子	16 さかさま「執心鐘入」	29 関得大君誕生
4 白雲渡遷の巻	17 恋愁トッパラーマ	30 天の川恋物語
5 白雪乙鶴	18 花の幻	31 海鳴りの彼方～対馬丸の予ら
6 おかしかなし月下乃道化	19 令嬢仁落城	32 平敷屋朝顔～哀・夏しゃ～
7 遭ざれ、結婚	20 麗良のアマンジャナ	33 伊野波節異聞
8 玉露の妖精	21 天飛衣	34 組踊版「シンデレラ」
9 無情の狐島	22 恋しニヌファ屋	35 万歳
10 山原船	23 組踊版「ももたろう」	36 桃太郎鬼城攻
11 海の天境	24 修羅の縁-尚軍王と袋中人発見-	37 イノシミ森屋敷
12 黄金のザン	25 サシバの契り	38 初桜
13 異聞鬼大城	26 夜討ち	

(2) 新作組踊の演目

(i) 琉球・近現代沖縄に関連する演目(22演目)

38演目中20演目が琉球・近現代沖縄を題材にした組踊であった。これらの新作組踊の創作背景として「組踊のドラマ性の欠如」^{注9)}が挙げられる。また、単に物語を組踊として上演するのではなく、物語の先に作者の「普遍的なテーマ」^{注10)}が設定されている。

(ii) 原作の組踊版アレンジ(8演目)

38演目中8演目に原作の組踊版アレンジが見られ、その作者全員が沖縄県立芸術大学学生・OBである。原作の組踊版アレンジの創作背景として組踊の県内外における周知度の低さが挙げられる。

(3) 新作組踊の演出

(i) 言語・衣装・音楽

表7は言語・衣装・音楽に関する演出の件数を示したものである。

表7 言語・衣装・音楽

	言語	衣装	音楽
伝統的な演出	34	26	35
新しい演出	0	2	0
併用	4	0	3
その他/不明	0	10	0
合計	38	38	38

伝統的な演出と新しい演出で対応する要素として、「言語」「音楽」「衣装」に関する演出が挙げられる。その中でも「言語」は38演目中34演目で琉球の言葉が用いられており、残りの4演目は琉球の言葉と共通語が併用されていたが、共通語の場合でもせりふは八八八六の琉歌形式で唱えられていた。また、「音楽」は35演目で琉球古典楽器の使用が見られ、残りの3演目は洋楽器が併用されている。以上から、組踊の聴覚的要素である「言語」と「音楽」の演出において伝統様式を踏まえた上で新たな演出が模索されていること、新作組踊の演出は組踊の本質を踏襲していると考えられる。また、「衣装」は3演目で洋装が見られたが、これらの演目は沖縄の近現代史を扱っており、新作組踊を表現する上で新しい演出が不可欠であったと考える。

(ii) その他の新しい演出

表8はその他の新しい演出の件数を示したものである。

表8 その他の新しい演出

演出内容	件数
現代劇風/沖縄芝居風	4
舞台装置	6
照明	19
音響	6

これらの演出を用いる要因として、鑑賞する上で予備知識と想像力が必要とされる組踊の鑑賞の手助けとしての役割が挙げられる。

その他の新作組踊の演出の特徴として、公演ごとに演出が異なる点が挙げられる。例えば、大城立裕作「花の幻」は、2010年度公演と2012年度公演で演出が異なることが新聞記事から読み取れる¹¹⁾。

(4) 小括

新作組踊が「組踊のドラマ性の欠如」と「組踊の普及」という背景より創作され、新作組踊が多く上演されている現状は、今日の組踊伝承が抱える課題

を如実に表している。また、半数以上が「琉球・沖縄に関連する組踊」であったことから、新作組踊は「沖縄の芸能」として創作されていると言える。演出の側面からは、組踊の本質を踏襲した上で新しい演出を実験的に用い、新たな模索がなされていることが明らかになった。そして、そのような新作組踊の演出が公演毎に新たに工夫されていることから組踊のドラマ性が再び創出されていると考える。

6. 結論

(1) 総括

宮廷芸能として創始された組踊は、琉球処分以降市井の芝居小屋、沖縄戦による台本焼失という危機を乗り越え 1972 年より文化財としての伝承が開始された。そして 2004 年の国立劇場おきなわ開場に伴い舞台芸術としての伝承が始まった。開場以降の動向として演目の多様化に伴う新作組踊上演の活性化と実演家の多層化が明らかとなった。近年の組踊伝承の特徴とも言える新作組踊は沖縄の伝統芸能として創作・上演され、その演出は組踊の本質を踏襲している。一方、その上演実態は、各主催団体が役割を果たしながら、上演頻度の低い古典、復活組踊の上演・再演による組踊レパートリーの拡大、古典組踊の更なる洗練、新作組踊の実験的上演を通じた組踊の可能性の模索を行っていることが明らかとなった。以上より、今日の組踊は、各主催団体が役割を果たしながら、伝統と新しさが両輪となり各組踊が相互に影響を与え合い伝承されていると結論づけた。

(2) 今後の展望と課題

今後の組踊伝承は伝統的な組踊と新しい要素が相互影響を与えながら、舞台芸術として公演の質を更に向上していくことが求められるだろう。そのために組踊の周知度向上と組踊公演に対する積極的な批評が必要であり、実演家が芸に集中できる環境の整備も課題である。

伝統芸能の伝承として、組踊のように古典を踏まえた上で現代の実演家によって新たな作品が創作され、古典と新作が影響を与え合うことで芸の質が向上し、次世代へと変容しながら伝承されていく姿は、他の伝統芸能においても理想的な伝承のあり方であると考えられる。

脚注

注¹⁾ 踊奉行は、国王や王妃などの年忌に王府より任命され、余興の舞踊や音楽の設営にあたる役職であり、行事の都度任命される臨時職である。

注²⁾ 「敵討物」は野心を抱く者によって主君や父親を闇討ちされた主人公が仇討ちを果たす物語である一方、「世話物」の内容は多岐に渡り、例として夫婦、親子の絆を描いたもの、姉弟が母のために犠牲になろうとするもの、我が子を盗人に盗まれないとするもの、恋愛もの、継子いじめ、鬼退治、などが挙げられる。

注³⁾ 組踊公演のスケジュールは年度毎に計画されるため、時期区分を年度ごとに設定し分析を行った。

注⁴⁾ 例えば 2009 年に「琉球舞踊」が国の重要無形文化財に指定、「組踊道具・衣裳制作修理」が国選定保存技術に選定された際に沖縄タイムスで 49 件の特集記事が生まれ記事件数が増加している。

注⁵⁾ 両紙の記事内容に大きな差が見られないため本論文では 2 紙合計し分析を行った。

注⁶⁾ 1997 年より伝統組踊保存会が年間 2 演目ずつ廃絶曲の復曲を行っており 2016 年現在までに 32 演目が復曲された。

注⁷⁾ 国立劇場おきなわ 10 年誌には、「古典演目としては、朝薫五番」の『二童敵討』『執心鐘入』『銘苅子』『女物狂』『孝行の巻』の他、『花売の縁』『手水の縁』『万歳敵討』などが多く上演されてきた作品である」と記載されている(国立劇場おきなわ 10 年誌(2014), p. 44)。

注⁸⁾ ユネスコ無形文化遺産代表リスト記載の翌年である 2011 年度は県外公演 21 件、海外公演 9 件の記事が見られたため、ユネスコ代表リスト記載記念の県外・海外公演の実施が記事件数増加の一因であると推測する。

注⁹⁾ 新作組踊を創作している芥川賞作家・大城立裕氏は、唱えと振りのマニュアルに乗ればそれで組踊になるという理解が支配的であることへの危機感と観客を確保するために組踊が面白いドラマとして訴えるエネルギーが求められると指摘している。

注¹⁰⁾ 大城氏は、「こういう話がありましただけでは、つまらない。その点、玉城朝薫は偉かった。作者の発見した普遍的なテーマが厳然として存在した」(大城立裕(2001)「琉球楽劇集 真珠道」琉球新報社 p. 137)と述べており、新作組踊とは単に組踊として新しい物語を上演するのではなく、テーマを含有しているべきだと言える。

引用文献

1) 当間一郎監修：琉球芸能事典、那覇出版社、p. 227、1992

2) 矢野輝雄：組踊を聴く、瑞木書房、p. 1、2003

3) 当間一郎：組踊写本の研究、第一書房、p. 2、1999

4) 沖縄県教育庁文化財課へのヒアリングより

5) 沖縄タイムス 1997 年 3 月 27 日付『芸能/伝統組踊保存会定期公演/評価に厳しい声も…/「花売りの縁」演出の不在指摘』、沖縄タイムス 2000 年 10 月 12 日付『若手はつらつと演技/組踊伝承者研修発表会/「となえ」に課題』、琉球新報 1998 年 2 月 19 日付『多くの課題浮き彫り/レベルアップ急務/組踊伝承者研修発表会』など

6) 琉球新報 2005 年 6 月 23 日付『組踊「伏山敵討」公演/見所も多彩に/国立劇場おきなわ/立ち回りに臨場感』、沖縄タイムス 2009 年 12 月 8 日付『秘めた執念力強く語る/ベテラン・若手が安定感/組踊公演「万歳敵討」』

7) 沖縄タイムス 2008 年 6 月 27 日付『訳入り 29 番集成 組踊台本資料集/伝統組踊保存会が発刊』

8) 琉球新報 2010 年 11 月 17 日付『<芸能インサイド>新作組踊・上/問われる様式/多彩な演出効果に賛否』、同年 11 月 17 日付『<芸能インサイド>新作組踊・下/組踊の概念に揺れ/議論の場、設ける動きも』

9) 沖縄タイムス 1997 年 6 月 23 日付『21 世紀への組踊(2)/国立劇場の課題/後継者育成/劇場の使命は伝統伝承/研修制度は舞台と並ぶ事業/実演家の層の厚さを/発生の指導法さえない』

10) 沖縄タイムス 2009 年 6 月 30 日付『開場 6 年 集客に課題/国立劇場おきなわ/「伝統に甘え」「芸能で生活できる環境/公演の質的向上も/実演家ら意見交換』

11) 琉球新報 2010 年 8 月 29 日付『創作組踊で沖縄戦を描く 「花の幻」 きょうまで』、琉球新報 2012 年 4 月 2 日付『芸能継承へ表現深化 創作組踊「花の幻」』